教職課程センター紀要　第2号　105－110ページ，2017年12月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.2 105－110, Dec. 2017

論　　文

中国語専攻学習者の学習開始時における動機づけの分析

—学生アンケートの自由記述分析から—

A Study of Chinese Major University Students' Motivation at the Beginning of Studying Chinese

—From Analysis of Free Description—

安藤　好恵

Yoshie ANDOU

Key words：中国語学習者，アンケート，目標レベル，自由記述

1．はじめに

本稿の目的は，中国語学習者が学習開始時において目標レベルをどこに設定し，どのように中国語を使いたいと考えているかを明らかにすることである。

これまで中国語学習者の動機づけについては，安(2004)，胡（2004)，任（2008)，王(2011)，張（2014）など多くの研究が行われ，さまざまな知見が得られている。しかしこれらの研究で行われた調査は「中国語を選択した理由」や「中国語を学習しようと思った動機」のような，過去にさかのぼり選択の動機を探る調査であり，その回答は用意された項目から選択する方式であった。

本研究では，学習者が学習後の未来をどのように設定し，どのように考えているかを知るために，学習者の目標とするレベルや中国語で何をしたいかなどについてアンケート調査を行った。中国語でしたいことについては自由記述を求め，得られた回答についてはテキスト型データ分析用のソフトウェアKH Coderを用いて分析することにより，恣意的な解釈に偏らず全体的な傾向を捉えることを試みた。

学習者が何を求めているかを具体的に把握し，学習活動に反映させることは学習効果を高める上で有用と考えられる。また，学習観は学習経験とともに変化していくものであるため，学習開始時における学習者の認識を把握しておくことで，その後の変化をより正確に測定できると考えられる。

2．方法

2.1　調査協力者と実施方法

本学中国語学科に在籍する1年生を対象に，2013年から2016年までの各年5月～6月にクラス別にアンケート調査を実施し，合計327名の有効回答を得た。調査結果は成績に一切影響しないこと，調査結果は教育研究の目的にのみ使用されることをフェイスシートに明記した。

2.2　分析に用いた変数

(1) 学習歴

本学中国語学科では，初修者を対象とした一般クラスの他に2013年—2014年は既習者クラスを，2015年－2016年は準既習者クラス，既習者クラスを設けている。既習者クラスはネイティブに準ずる語学力を持つ学生，準既習者クラスは既習者ほどの語学力はないが初修ではない学生で構成される。本研究では学習歴によって動機づけに差があるかを知るため，「一般クラス」と「既習者クラス（＋準既習者クラス)」の2つのカテゴリーに区分した。[注1)]

(2) 目標レベル

「卒業までにどの程度中国語ができるようになりたいですか」と教示し，「1．あいさつや自己紹介ができる初級レベル」，「2．生活上の基本的なコミュニケーションができ，旅行などで困らない中級レベル」，「3．中国人と中国語でディスカッションしたり，中国語でスピーチができる上級レベル」から1つを選び回答してもらっ

た。

(3) 中国語でしたいこと

「中国語ができるようになったら，何がしたいですか」と教示し，自由記述形式で回答してもらった。

3．分析結果

3.1　学習歴と目標レベル

学習歴と目標レベルの集計結果から，一般クラスの約90%以上の学生が，卒業までに中級以上のレベルを習得したいと考えていること，そのうち約51%の学生が上級レベルを目指していることがわかった。既習者クラスの学生は約84%が上級レベルを目指していることがわかった。(表1)。

表1

目標レベル／クラス	一般	既習	合計
初級レベル	26	1	27
中級レベル	131	9	140
上級レベル	105	53	158
合計	262	63	325

3.2　自由記述回答のデータ分析

「中国語ができるようになったら，何がしたいですか」に対する自由記述回答310件について，テキスト型データ分析用のソフトウェアKH Coderを用いて分析を行った。

データは1行につき1件ずつ入力し，頻出語を確認したうえでそれらの語彙の共起関係を探った。

その結果，「中国」という語について，「中国に行きたい」のような国を指す場合と「中国の方と話したい」のような人を指す場合に分かれること，また「就職」や「仕事」という語について，「活かす」「生かす」「いかす」の3つの語が使用されていることがわかったため，「中国の方（と話したい)」のような記述を「中国人の方(と話したい)」に，「(就職に) 生かす／いかす」を「活かす」に整形し同様の処理を行った。最終的な結果を表2に示す。

表2　単純集計結果

総抽出語数（分析使用語）	2291（1093）
異なり語数（分析使用語）	344（260）
文	646
段落	310

次に自由記述データに出現した上位30語と出現頻度を図1に示す。

図1から，頻出語上位には「中国」「中国語」「中国人」「旅行」「仕事」「交流」などの名詞が挙がり，次いで「行く」「使う」「話す」などの動詞が続く。このことを踏まえ，KH Coderの「共起ネットワーク」コマンドを使い語句同士の関連性を明らかにするための分析を行った。出現数による語の取捨選択については最小出現数を5に，描画する共起関係の絞り込みについては描画数を60に，強い共起関係ほど太い線で描画し，出現数の多い語ほど大きい円で描画するように設定した（図2)。

更にKH CoderのKWICコンコーダンスコマンドを使い，頻出語の前後にどのような記述がなされているか確認した。

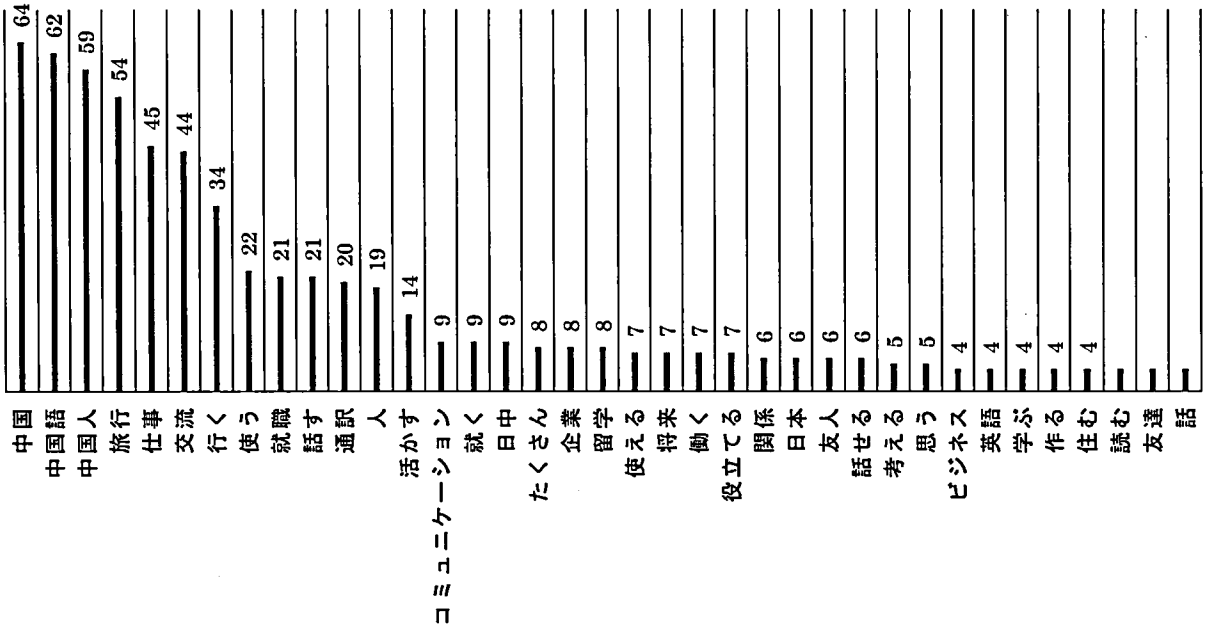

図1　自由記述データに出現した上位30語と出現頻度

図2において，頻出語上位に挙がった「中国」「中国語」「中国人」「旅行」「仕事」「交流」の6語は，「中国」は「旅行」と，「中国語」は「仕事」「交流」と，「中国人」は「交流」とそれぞれ結びついていることがわかる。「中国」と「旅行」は右上に位置し，「行く」という動詞とつながっていることから，中国に旅行に行きたいという内容の記述が多かったことがうかがえる。

「中国」という語についてのKWICコンコーダンスコマンドの集計結果は，「行く（30)」「旅行（22)」「交流(6)」の順であった。「中国語」「仕事」「交流」は中央やや右上に位置し，「使う」「人」などの語とつながっていることから中国語を仕事で使いたい，中国語で人と交流したいという内容の記述が多かったことがうかがえる。「中国語」についてのコンコーダンスの集計結果は「仕事（16)」「使う（15)」「交流（10)」「人（7)」であった。「中国人」「交流」は中央右寄りに位置し，「話す」とつながっていることから，中国人と交流したい，話したいという内容の記述が多かったことがうかがえる。

「中国人」についてのコンコーダンスの出力結果は，「交流（20)」「話す（17)」「中国語（5)」の順であった。

3.3　学習歴と中国語でしたいこと

3.2から学生が考える「中国語ができるようになったらしたいこと」の上位は，「旅行」「仕事」「交流」の

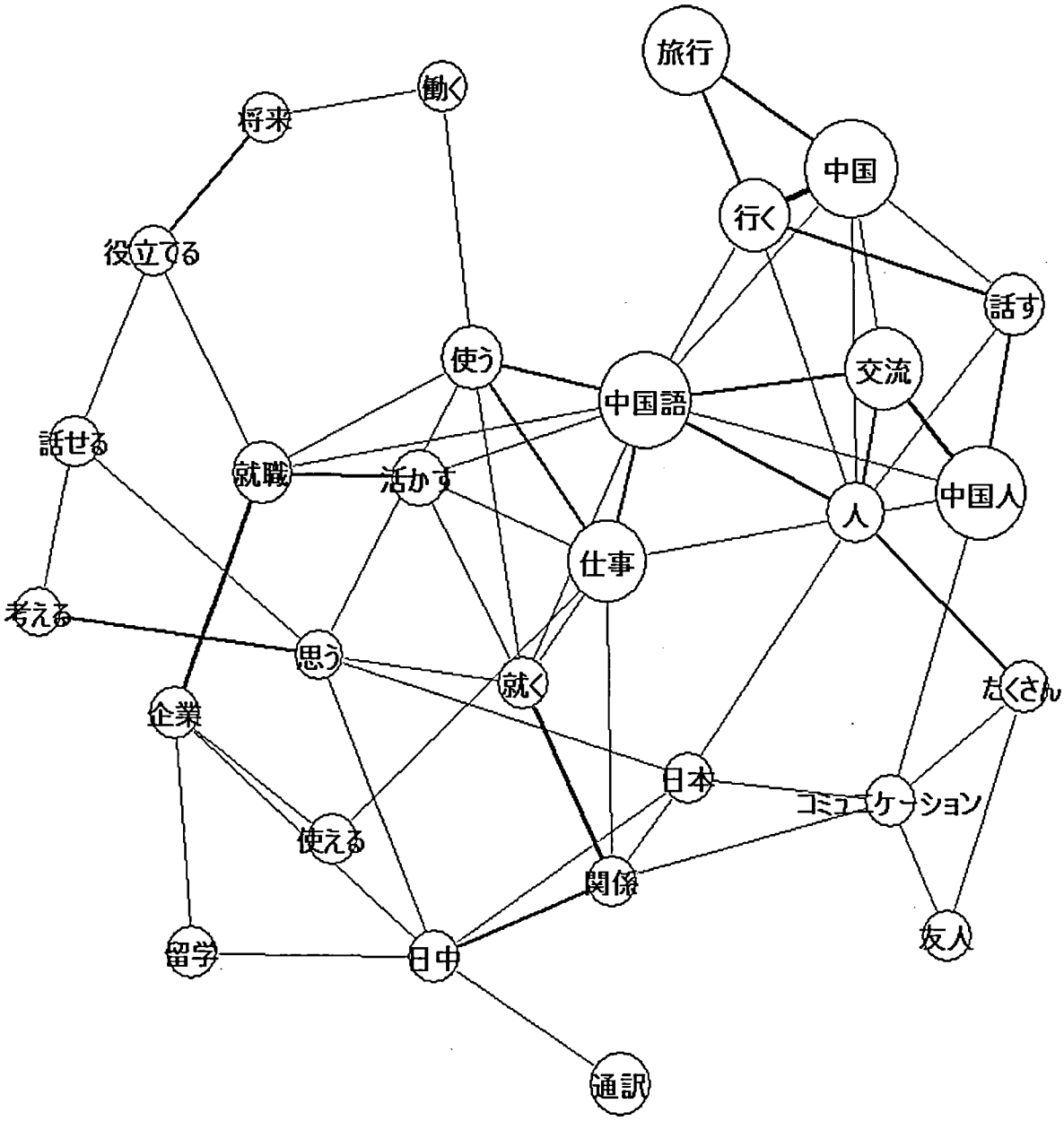

図2　自由記述の共起ネットワーク

3点にまとめられることがわかった。そこで自由記述に上記3つの内容のどれかが含まれるもの（例えば「仕事」には「就職」「働く」「企業」「通訳」など，仕事に関する語が含まれているものを含めた）について，一般クラスと既修者クラスの割合を比較した。その際，「中国人の人と仕事をしたり交流を持ったりしたい」のような，1つの回答内に2つ以上の内容が含まれているものは除外した。最終的な集計結果を表3に示す。

表3　学習歴としたいこと

したいこと／クラス	一般	既習	合計
旅行	61	7	68
仕事	67	27	94
交流	73	9	82
合計	201	43	244

表3から，一般クラスの学生は「交流」がやや高く，次いで「仕事」「旅行」の順であった。対するに既修者クラスの学生は「仕事」で使いたいと考えている学生が約63%を占めていることがわかった。以下，それぞれの記述の一部を挙げる。

①「旅行（一般クラス）」
・一人で中国に旅行に行きたい。
・家族で中国旅行に行きたい。
・中国に友達を連れて旅行に行きたい。
・日本語を使わずに中国を旅行したい。
・中国へ旅行に行って現地の人と中国語で交流してみたい。

②「旅行（既修者クラス）」
・一人で中国を旅行したい。
・中国に一人で行く。

③「仕事（一般クラス）」
・就職活動に役立てたい。
・中国語を活かした職業に就きたい。
・中国語の通訳
・日中の本の翻訳
・ホテルに就職して中国からの観光客をおもてなししたい。
・将来，空港のグランドスタッフとして働きたい。
・教員免許を取って教壇に立ちたい。
・外国で働きたい。

④「仕事（既修者クラス）」
・日中通訳。
・通訳・翻訳。
・外資系の企業などに就職して活かしたい。
・海外駐在員。
・中国語の先生になりたい。
・仕事に役立てたい。

⑤「交流（一般クラス）」
・親と話したい。
・親族に中国人がいるので，その人たちと中国語で交流ができるようにしたい。
・留学生と話したい。
・中国人と交流し中国の文化を深く考えてみたい。
・中国で友人を作りたい。
・外国人と真正面から議論したい。

⑥「交流（既修者クラス）」
・中国人の親戚と交流がしたい。
・中国語を使って中国人の方とたくさん交流したい。
・交流を広げ，いろいろな人脈づくりをしたいです。
・日本に来る中国人などとコミュニケーションを使って日中関係を良くしたい。

一般クラスと既修者クラスで違いが見られたものは，「旅行」に関する記述において，一般クラスでは家族や友人など誰かと一緒に中国に行きたい，という記述が複数あったのに対し，既修者クラスでは誰かと一緒に旅行したいという記述はなかった。「就職」においては，一般クラスでは仕事そのものではなく就職活動に役立てたいという内容の記述があったが，既修者クラスではそのような記述はなかった。

3.4　目標レベルと中国語でしたいこと

次に，一般クラスの学生のみを対象に，目標レベルと「中国語ができるようになったらしたいこと」の割合を調べた（表4）。

目標が初級レベルの学生は「仕事」や「交流」で，中級レベルの学生は「旅行」や「交流」で，上級レベルの学生は「仕事」や「交流」で中国語を使いたいと考えていることが明らかになった。

表4　目標レベルとしたいこと

目標レベル／したいこと	旅行	仕事	交流	合計
初級レベル	1	8	7	16
中級レベル	46	21	39	106
上級レベル	13	38	27	78
合計	60	67	73	200

4．考察

本研究の目的は中国語学習者が学習開始時において目標レベルをどこに設定し，どのように中国語を使いたいと考えているかを明らかにすることであった。以下，分

析結果に基づき考察していく。

4.1　目標レベルについて

今回の調査結果では，一般クラスの90％以上の学生が中級レベル以上の語学力を習得したいと考えていた。従って，クラス単位など全体で共有する学習目標を中級以上に定めることは，学習者と教員双方にとって適切と言えるだろう。しかし一方で調査時において学習者は学習を開始して間がなく，中級レベル以上の難易度について具体的に認識している学生はごく僅かであろうことを考慮しなければならない。教員は，学習者が実際に学習を進めていく過程で直面し得る困難をあらかじめ予想し，目標と現実のギャップから学業不振や学習意欲の低下に陥らないようサポートしていく必要があるだろう。また目標が初級レベルでありながら仕事で使いたいと考えている学生が数名いた。これは矛盾するようであるが，このような学生は中国語を使う仕事に就きたいというよりは，就職活動において中国語が話せることをアピールしたいと考えていると思われる。

4.2　中国語でしたいこと

中国語でしたいことに対する一般クラスの自由記述回答は，「旅行」「仕事」「交流」の３点に集約できた。この３点のうち，割合的に最も多かったのは「交流」であった。文部科学省の「外国語」学習指導要領においてもコミュニケーション能力の育成は最も重要視されている。[注2)] このことから「交流」を主軸とし，個々の場面設定として「旅行」や「仕事」を組み込んだ学習活動を展開することは，学習者と教員双方にとって有用であると考えられる。

学習指導要領では，言語活動を実践する上で設定する言語場面の中の「特有の表現がよくつかわれる場面」に「旅行」が，「生徒の身近な暮らしや社会での暮らしにかかわる場面」の中に「職場での活動」が挙げられている。また高等学校での中国語，韓国語教育の学習指針を打ち出した『外国語学習のめやす』では，「交通と旅行」や「人とのつきあい」など15の話題分野についてレベル別のコミュニケーション行動を提案している。本研究の調査は大学生を対象としたものであったが，中国語は初修外国語であるので，１年生に対しては高校での英語の授業で実践されてきたであろう，こうした学習活動を取り入れることも有効であると考えられる。

今回，中国語でしたいことに対する既修者クラスの回答は，「仕事」が全体の６割以上を占めていた。既修者クラスの学生にとって，「旅行」や「交流」で中国語を使うことは既に経験済みであり，とりたてて記述することではなかったのだろう。既修者クラスの学生は語学力や環境面（親族が中国にいるなど）において一般クラスより優位な条件にあるが，そのことを差し引いても「旅行」や「交流」は自分の意志でそうした情況を作り出すことができ，「仕事」よりは実現が容易であり，得るものも大きい。このことからも，一般クラスの学生には早い時期に「旅行」や「交流」などの活動に取り組むよう促していきたい。その上で，卒業後の進路（仕事）と中国語にどのような関わりを持たせるか，学生個人の将来目標の形成につながる指導が必要になるだろう。

最後に，少数の自由記述回答について取り上げ，全体を概観する。今回の調査では，上記以外に以下のような回答が得られた。具体的な内容としては，

・中国語の歌を歌ってみたい（一般クラス）
・本を読みたい（一般クラス）
・中国語のサイトを読みたい（一般クラス）
・中国語の映画やドラマを字幕なしで見てみたい（一般クラス）

などがあった。これらは「中国文化への興味」にまとめられる。こうした活動を学習に組み込むことで，学習者の興味や関心を引き出し，学習意欲を高めることが期待できる。

また，抽象的な内容としては，

・中国に行き自分の中国語のレベルを試してみたい（一般クラス）
・自慢したい（一般クラス）
・社会で活躍できるようになりたい（一般クラス）
・言葉で困っている人を助けたい（一般・既修者クラス）
・日中友好に貢献したい（既修者クラス）

などがあった。これらは「挑戦行動」「有能感への欲求」「社会貢献への欲求」などに結びついていると考えられ，いずれも外国語学習の重要な動機づけになり得るものである。

上記に挙げた回答は今回の調査では少数意見であったが，動機づけは複数の要因から成り立ち，学習経験とともに変化するものであることから，教員側はこうした多様な動機づけの存在について把握しておく必要があるだろう。

5．まとめ

本研究では中国語学習者を対象に，学習者自身の設定

する目標レベルと，何をしたいかという具体的な欲求について調査し分析した。その結果，学習歴による学習目標と欲求傾向の違いが明らかになった。教員は学習者の傾向を把握しながら全体で共有する目標を定め，学習者が興味や関心を持てるような学習活動を展開しながら学習者の望む目標レベルへ導くような指導をしていく必要があるだろう。

注

1）なお，2014年までは準既習者に相当する学生が一般クラスに混在していた可能性はあるが判別が困難なこと，また当時は既習者クラスしかなかったため，準既習者レベルの学生も一部受け入れていた背景があるため，この２区分とした。

2）学習指導要領外国語科の目標は「外国語を通じて，言語や文化に対する理解を深め，積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り，情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。」と定められている。

参考文献

安寧2004.「中国語学習における学習動機，達成目標志向性，学習行動，教授法の好み，成績の間の関連性」京都大学大学院教育学研究科紀要第50号，227-240

樋口耕一2004.「テキスト型データの計量的分析―２つのアプローチの峻別と統合―」『理論と方法』19（1）：101-115

樋口耕一2014.『社会調査のための計量テキスト分析　内容分析の継承と発展を目指して』ナカニシヤ出版

胡玉華2004.「大学の中国語履修者の学習意識についての実態調査」駒澤大学外国語学部論集第61号，97-110

文部科学省2010.『高等学校学習指導要領解説　外国語編・英語編』開隆堂

任利2008.「日本人大学生の中国語学習に対する動機―因子分析を用いた探求―」筑波日本語研究，第十三号，13-32

當作靖彦・中野佳代子2013.『外国語学習のめやす　高等学校の中国語と韓国語教育からの提言』，国際文化フォーラム

王蕊2011.「APU中国語学習者への自立学習支援の必要性―中国語学習者の学習実態の調査研究報告―」ポリグロシア20，129-143

张软欧2014.「日本大学生汉语学习意识调查及问题所见」関西大学外国語教育フォーラム（13），45-66